

## 論文

## 日光東照宮における「極彩色」と「青地に金彩」

“*Gokusaishiki*” and “*Golden-coloring on blue background*” in *Nikko Toshogu Shrines*

北嶋 秀子 Hideko Kitajima

## Abstract

*Chokugaku* (a sign dedicated to shrines by an Emperor's own handwriting) located on the face of *Yomeimon* at *Nikko Toshogu Shrines*. Since this is placed in such a showy spot, it seems that there is a special meaning to it. Such kinds of signs are called “*Gokusaishiki*”. These signs are known as *Chokugaku* and *Okimon* (sign of figures). They are given unique meaning through their color scheme “*Golden-coloring on blue background*”. One of the *Okimon* is located on *Koryo* at *Suibansha*. The dragon, phoenix and other mythical animals are employed as figures of *Okimon*, and it is generally known that they symbolize *Tokugawa Ieyasu*.

Upon closer inspection of “*Golden-coloring on blue background*” in relation to Chinese philosophy, it can be expressed that gold embodies the color of yellow. Therefore the meaning of “*Golden-coloring on blue background*” has to compare with blue and yellow. These colors are inspected by their literal meaning, and it is cleared that blue represents the color of the lower rank such as the color of clothes for humble people. Contrasting the blue, yellow represents the color of a higher rank. The color of clothes is permitted to wear only for the Emperor and the crown prince. It has been discovered that the blue and yellow are contrastive color in their color rank. “*Golden-coloring on blue background*” typifies the “*Gokusaishiki*”, and that consists of two contrasts with visual and color rank in *Toshogu*.

The meaning of gold is similar to yellow, besides gold denotes the power and wealth. This part is significant for *Toshogu*. That is to say, the great force of *Tokugawa-shogunate* and *Ieyasu* are symbolized by “*Gokusaishiki*” and “gold”.

Keywords: *Nikko Toshogu Shrines*, *Gokusaishiki*, *Golden-coloring on blue background*, *Okimon*

## 要旨

日光東照宮(以下、東照宮)・陽明門の正面に懸かる勅額は、人目につきやすい箇所配されている為、特別な意味が込められていると考えられる。「極彩色」と称されるその類は、勅額のほかに「置紋」と呼ばれる独特な意味を与えられた「青地に金彩」の紋様として、水盤舎・虹梁などに見出される。置紋の形象には龍や鳳凰などが採用され、いずれも徳川家康(1542-1616, 以下、家康)を象徴するものであると一般的には理解される。

「青地に金彩」を陰陽五行説の五色から検証する場合、「金=黄+金属光沢」と表すことができるので、色相においては青と黄で比較しなければならない。青と黄を字義から検証すると、青は「青侍」のように官位の低いことを表し、また中国では「青袍」が「賤者の服」とされることから、身分の低い者の服の色であることがわかった。それに対して色相・黄は天皇と皇太子だけに着用を許された「禁色」として用いられる色である。青と黄が身分や官位において対照的な色相であることは新たな発見であった。東照宮において、その「極彩色」の代表とも目される「青地に金彩」は、「視覚的な対照性」と「色格における対照性」という2つの対照性をもって成り立つ。

金のもつ意味は黄に準じるが、さらに権力や富を象徴するのが金であり、この部分が東照宮では大きな意味をもつ。すなわち、勢い猛の徳川幕府や家康を「極彩色」や「金」で表したのである。

キーワード：日光東照宮、極彩色、青地に金彩、置紋

## 1. はじめに

知られる通り東照宮は家康の霊廟であり、現在の東照宮は、3代将軍・徳川家光(1604-1651, 以下、家光)によって1636年から6年をかけて全面的に造替されたものである\*。

前報告では、主に『国宝東照宮陽明門・同左右袖塀修理工事報告書』<sup>1)</sup>(以下、『修理工事報告書』)に記された「極彩色」を基に、東照宮における「極彩色」の7つの意味を示し、それが徳川幕府にとって眩耀誇示の彩色であることを明らかにした。そして、「極彩色」に主役と脇役の2つの型があること、主役型「極彩色」を代表するのは「地が濃色で金彩を含む彩色」とりわけ「青地に金彩」であることを示した。

「修理工事報告書」は、主に国宝や重要文化財に指定された建造物において修理修復を行った場合、記録保存を目的に修理竣工後に提出が義務付けられている。明治30年の「古社寺保存法」より始まるが、昭和4年に「国宝保存法」に改められると、修理現場での調査態勢が強化され報告書の内容も工事中の発見銘文や解明された学術的事項が増えた。昭和25年の「文化財保護法」に移行後は、その学術的価値はますます高くなり、その建造物に関する最も権威のある文献となっている。『修理工事報告書』は大河直躬博士ほかによって執筆されている。

東照宮において建築学的な見地からの研究は多いが、色彩学を基本とした研究は少ない。そこで、今回は東照宮を代表する「極彩色」である「青地に金彩」に焦点を当てて検証する。

東照宮は、「見ザル、言わザル、聞かザル」の三猿で有名な神廨(唯一の和様建築)以外すべて唐様の建造物で構成される。また、建造物の随所に中国、特に陰陽五行説との関連が見出される。

それが思想としても深く入り込んでいることは、陽明門の唐子遊びの主題が「孟母三遷の教え」・「司馬温公のかめ割り」のように中国の故事にちなんだものであること、また中国の伝説的説話から題材をとった仙人像が配されることからわかる。さらに唐門に「堯と舜」・「竹林七賢人」・「巢父と許由」など賢人の彫刻が配されるのも、中国の思想を尊んだことによるものである。

本稿は、その中国思想の根源とも言える陰陽五行説を基に「青地に金彩」を考察しようとするものである。

陰陽五行説とは、古代中国に起源をもつ哲理で、五行とは、万物組成の元素「木・火・土・金・水」である。

一切の万物は陰・陽のエネルギーによって生じ、五行中、木・火は陽に、金・水は陰に属し、土はその中間にあるとし、これらの消長・運行によって天地の変異、災祥、人事の吉凶を説明する。五行には色彩・方位・季節などが対応している。すなわち、五色とは青・赤・黄・白・黒で、方位は東・南・中央・西・北、季節は春・夏・土用・秋・冬である。

陰陽五行説の五色は、古来聖域を守護するための魔よけのシンボルとして用いられた。両国国技館の吊り屋根の四隅には、青・白・赤・黒の房が下げられている。これも東西南北に対応する五色で、元来は五穀豊穡を祈念するものであったが、ここでは土儀を護る魔よけの役割を果たしているのである。

東照宮を代表する「極彩色」が「地が濃色で金彩を含む彩色」の「青地に金彩」であることは既述の通りである。この「極彩色」例には、陽明門・両脇の間天井に描かれた、地が緑青で金彩の雲や、砂子蒔の霞を有する天人像と迦陵頻伽も含まれるが、東照宮を代表する「極彩色」という場合には、「青地に金彩」の「地が群青で、図像として金色の龍や鳳凰など」が配された置紋を抜きにしては考えられない。それらは、特別な意味が込められた「極彩色」だからである。

それでは、「青地に金彩」の置紋は何を表しているのだろうか。まず、陰陽五行説と東照宮との関連を検証し、その後、「青地に金彩」の置紋が意味するところを形象・色彩と辞義の面から明らかにしていく。

\* 寛永の大造替の決算書である『東照宮御造営帳』が幕府に提出されたのが、寛永19年(1642)9月であった。

## 2. 陰陽五行説と日光

日光と陰陽五行説との関連について、具体的にみていこう。例えば陽明門について見れば、それを代表する色は、柱に代表される胡粉の白、組物他に用いられている黒漆の黒と、金彩の金、そして極彩色の青・赤・緑などである。

その内、青が濃くなったものを黒とみなすことができる。青は中国語では黒の意味も含むことは、青布が黒い布、青髪が黒髪を意味することからもわかる。そして青と緑については「青い麦」が実際の色相は緑であるように、当時代の概念として「あお」という一つのことが使われていたことから、緑は青とも考えうる。

また、金は色相・黄である。したがって、陽明門は5つの色、すなわち青・赤・黄・白・黒によって構成

されているとも言え、陰陽五行説の五色と一致する。

陰陽五行説では原初唯一絶対の存在は、「混沌」である。これを『易』では「太極」とするが、この太極から派生するものが「陰陽」二気である<sup>2)</sup>。すなわち、「太極」とは『易』の生成論において、陰陽思想と結合して宇宙の根源として重視された概念である。その「太極」から始まる宇宙生成を描いた図が「太極図」で、「陰陽紋」ともいう。この陰陽紋は、黒が生れては消える、それと同時に白が生まれ、白が消滅するときまた黒が生まれる、と永劫不易でエネルギーとして絶えることがない様を表す。すなわち、色彩において白と黒で代表される陽明門は、永劫不易で絶えることのないエネルギー生成を表していると筆者は解釈する。

次に、陰陽五行説では、四方に四神が対応する。四神とは、高松塚古墳の壁画にも描かれている北の玄武・東の青龍・南の朱雀・西の白虎で、天の四方をつかさどる神である。この四神に相応じた、北に丘陵・東に流水・南に汗地・西に大道がある場所が理想的な吉地とされる。日光の場合、北に日光連山・東に稲荷川・南に大谷川・西に中禅寺道や瀧尾道があり、まさに「四神相応」の理想的な地相をそなえている<sup>3)</sup>。さらに山川・水流などの様子を考え合わせて、建築物の位置を定める風水においても、日光は理想的な地相であるといえる。このように日光修験の伽藍群を移して建てられた<sup>4)</sup> 東照宮は、陰陽五行説との関係により、方位と自然の地形が重要視され、四神に相応じた吉相の地が選ばれていたのである。

さらに、東照宮という霊廟は、江戸のほぼ真北に建設された。これは古代中国の「宗廟祭祀は北方陰祀である」<sup>5)</sup> との思想によったものと考えられる。中国の考え方では、死者の魂魄は死後身体から遊離し、魂は天に上って神となり、魄は下降して鬼になるといわれる。北方はこの魂魄を一つに収束するところであるから、北に宗廟をつくるというのである。直接的には家康の遺言によって決定された日光霊廟の地であるが、家康が日光と決めた根底には、中国の陰陽五行説を知悉し、日光が江戸のほぼ真北に位置するからと推察される。北斗七星や北極星が住む北の空間には、人間の生命を支配する神秘的な力があると考えられており<sup>6)</sup>、陰陽道や風水ばかりではなく、仏教でも北を神聖視した。また、東照宮廟内の配置において、主な社殿の北側に、墓所である奥社・宝塔が建っているのも、陰陽五行説の哲理によっていると考えられる。

東照大権現は、北極星を背に南面して座し、その先

には江戸城がある。江戸すなわち徳川幕府の安泰を守護神として見守るという家康の遺志が感じられる。主な建造物である本殿・唐門・陽明門は、南に向いて建っている。これらの真後ろには北を示す北極星が輝いている。陰陽五行説では、北極星を中心とする部分が天の中心・宇宙全体を主宰する神「天帝」と考えられている訳である。したがって、本殿など南面する建造物を拝むということは、同時にそれらの背後の「天帝」を拝むことでもある。ここでは家康と天帝が重ねられ、東照大権現を最高神とする手法が考えられているのである。

ところで、平安時代の権力者・藤原頼通(992-1074)は、この世に極楽浄土を造るべく平等院鳳凰堂を建立した。そして、家光は江戸の世の守り神として東照宮を造らせた。特に陽明門は神仙思想を取り入れ、中国の仙人や悪霊からの守護神とされる霊獣で飾り立てられた。

それまで神社とは、自然信仰から生まれた神や、菅原道真を祀った天満宮のように、たたりを避けるために怨霊を神として祀った場所であった。しかし、日光において祀られるのは神や仏ではなく、家康という身近で生きた人になり変わった神である。そして、その神を守護する役割を中国の仙人や霊獣に託したことが重要なのである。ここには家康=主、中国の仙人や霊獣=従という関係が成立し、神仙思想を取り込んだだけでなく、それを家康を最高神に祀り上げるための手段としても利用している。

また、陽明門は、東照宮の中で霊獣彫刻の数が一番多い建造物である。したがって、陽明門の東照宮内における位置付けもおのずと推察される。陽明門は東照宮の「魔よけ」の門なのである。「魔よけ」の主が、霊獣や仙人であることは、陽明門が、ひいては東照宮が、中国つまりは陰陽五行説との結びつきがいかにかに強いかを示しているといえよう。

### 3. 「極彩色」の色彩

東照宮における「極彩色」である「青地に金彩」の「青と金」を中心に色彩の面から考察する。

さて、中国の創世記は、陰陽思想の表出に他ならないが、それをそのまま踏襲している日本人は、当然のことながら中国の五色の色彩観を受け入れている<sup>7)</sup>。陰陽五行説で青と金を中心にすえ五色や五行を考えれば、相対するものはわかりにくい。方位や季節で見ればそれが明らかである。すなわち、東に対する西、

春に対する秋であるから、五行で金に対するのは木、五色で青に対するのは白ということがわかる(表1参照)。

表1 五行配当表

五行	木	火	土	金	水
五色	青	赤	黄	白	黒
方位	東	南	中央	西	北
季節	春	夏	土用	秋	冬

「青と金」はどちらも色彩として存在するので混乱しがちであるが、「青」は五色の青、「金」は五行の金であるから、「青と金」を比較することはできない。これら比べるためには、五色の青に対する「白」・五行の金に対する「木」でなければならない。すなわち、五色では「青と白」、五行では「金と木」で比較しなければ、その真意はわからない。

さらに色彩の「青と金」に注目するならば、「金」は「黄に金属光沢を有する色」であるから、色相「青」は「黄」と比較しなければならない。すなわち、「青と金」は色相・「青と黄」として考えるべきである。

### 3.1. 青

五色の一つ「青」は既述の通り、陰陽五行説では五行で木・方位は東・季節では春に当てられる。色相・青は中国語では青・緑・黒の意味を含み、日本より範囲が広い<sup>9)</sup>ことが知られる。青は色相・青のほかに「青眼」が「黒い目」、「青衣」が「黒服」を、「青草」が「緑の草」を、「青苔」が「緑の苔」を意味する。このことから中国語の青の範囲の広さが理解されよう。

「晴れ」の衣に対して、青衣が「褻」の衣である黒服やふだんの身なりを表すことは、「青」という文字の色格によるものであろう。また、「青袍」には「賤者の服」という意味もある。

青は「あおい」や「青二才」に見られるように未熟であること、そして「青侍」のように官位が低いことを意味する。したがって、「青」は色格としては決して高いとはいえない文字である。

また『漢字源』(学習研究社、2002)には、「昔、あお竹の札に文字を記録したので、記録を青という」とある。「あお竹の札」を竹簡といい、文字を書く紙の役割をした。北京オリンピック(2008)の開会式で、筆をイメージした無彩色の衣裳を着た多くの出演者たちが手にしていたものが竹簡である。竹のあま皮から転

じて、竹簡のことを青<sup>9)</sup>ともいう。

竹は生命力が強く、どこにでも根を張り、その勢力圏を急激に拡大する植物である。そのような植物から作られる竹簡は、手に入れやすものであり、誰もが手にすることができた。希少価値のある貴金属・金と対極に位置することがわかる。したがって、青は色格という点において万人向けの色相であることが想像される。

### 3.2. 黄

黄は五行説では地の色(土色)、中央の色とされる。五行では土・方位では中央・季節では土用に当てられる。また、「黄金」のように「こがね」や「貨幣」など、価値あるもののたとえとして用いられる。

日本の衣服例(養老2年、718)では、黄袍は無位の色とされるが、黄は一般的には地上の支配者・皇帝の色で高貴な色とされる。何事につけ範を中国に求めた古代日本人は、それを我が国にも導入し、黄櫨染(こうろぜん)を天皇の、黄丹(おうに)を皇太子の正式袍の色とし、禁色とした。黄丹は「チャイニーズレッド」ともいわれ、つよい黄赤であり、黄櫨染は茶系統の色である。『日中辞典』<sup>9)</sup>には「黄色の色調は日本語の黄色よりかなり広く、茶色に近い色や赤に近い場合もある」と記されているので、つよい黄赤であっても茶系統の色であっても中国では色相・「黄」の範疇にある。黄砂に見られるように、黄色は中国の国土の色でもあり、最も尊い色であった。

東照宮で色相・黄は、顔料の黄土によって彩色されたものである。黄土は茶色の纏綿彩色(朱土・黄土・胡粉)の中間色として使用される場合が多い。金を「色相・黄に金属光沢を有する色」と定義すれば、金に代表される東照宮での色相・黄の大部分は、金から金属光沢を引いた金の下地としての色相である。したがって下地に黄を含む金は、豪華で光り輝く希少価値のある貴金属であるという以前に、禁色のような高貴な色ともいうことができる。

### 3.3. 金

金色はJIS慣用色名にもあり、「銅族元素の一つで、単体は黄金色で光沢があり、厚さ0.1マイクロメートルの箔にもできる貴金属、金のような色」<sup>10)</sup>と説明される。

金は古代から仏像や仏具に使用されてきたが、前回指摘したように、建造物へ装飾彩色として金が用いられるようになったのは、桃山時代からと考えられる。

この時代には織田信長(1534-1582, 以下, 信長)・豊臣秀吉(1537-1598, 以下, 秀吉)や家康のように, 天下統一を果し, 国を一つにまとめ上げた英雄たちが現れる。

信長は安土城, 秀吉は黄金の茶室など金をふんだんに使った建造物を造り, その金を己が力の背景とした。

その安土城についてみれば, 信長は天正4年(1576)に壮大かつ奇抜な安土城天守を築いている。その金彩は「何れも, 下より上まで, 御座敷の内, 御絵所, 悉く金なり」や「上七重め, 三間四方, 御座敷の内, 皆金なり。そとがわ, 是れ又, 金なり」<sup>11)</sup>と記されている。すなわち, 権力者・信長にとって金とは権力そのものであり, 金彩の範囲が広ければ広いほど, 権力が強大であることを示していた。

秀吉の黄金の茶室も同様である。茶道具だけではなく, 茶室全体まですべて金であったことは, 豊富な金すなわち, 強大な権力を視覚的に示すものである。

そして, 家康の東照宮・陽明門で使用された金箔の枚数は21万枚<sup>1)</sup>である。金箔1枚が10.9cm角, 重さは100枚で1.5gないし2gであるから, 陽明門だけで3.15~4.2kgの金を使用されていることになる。決して大きい建造物とはいえない陽明門に, これだけの金を使用しているわけであるから, 大半が金彩であるといっても過言ではないだろう。

さらに、『修理工事報告書』の第1章に「陽明門の詳細」について記した箇所がある。A4サイズを上下2段組にして3頁(『修理工事報告書』の38~40頁)である。これだけの中に鍍金, 金欄巻, 金物, 金物包, 漆箔, 沈金彫, 絵箔など金色を表す文字が38頁に40箇所, 39頁に87箇所, 40頁には98箇所もある。もし, これらの文字を網掛けにすれば, その3頁はほとんど灰色になるくらいである。それほどまでに東照宮では金彩が使われている。その他にも屋根の紋金具, 銅板金具や唐草瓦に使われる漆箔押がある。また漆箔押は高欄の逆蓮の銅製金具の上にも使用されている。いずれにしても, 東照宮を代表する色彩が金色であることを裏付け, その権力の強大さを金彩の多用によって示している。

権力者のもつ目に見えない権力を, 実際以上に拡大して見せ, 誰にでもわかるように顕現したのが「金」であった。金は色褪せることなくいつまでも光輝くこと, 豪華な感覚, 希少価値のある貴重な金属であることなどから, いつの時代にも人々を魅了してきた。さらに

黄金の輝きを失わないことから, 不老不死の象徴ともされた。そしてそれは時には権力者の権力誇示であり, 時には富の象徴であった。

### 3.4. 青と白

この項の最後に色彩と方位の関係から, 青が表す「東の青龍」と, それに対する「西の白虎」の関係についてみていこう。

「東の青龍」と「西の白虎」の関係は, 東照宮では特別な意味をもつと考えられる。それは徳川幕府の守護神・東照大権現となった家康が, 天文11年生まれ(1642)の寅年であること, それに加えて, 正保2年(1645)それまで東照社であった一神社を, 宮号が付いた現在の東照宮にした立役者である家光が, 慶長9年の辰年生まれだからである。

天皇より宣下された宮号を称するのは, 菅原道真を祀る天満宮と東照宮だけであり, なおかつ江戸時代を通じて例幣使\*が派遣された神社は, 伊勢神宮と東照宮だけであるから, 家光の東照宮における功績は計り知れない。

家康は寅年の寅の刻に生まれ, その時, 生母・於大の方が日頃崇拝していた三河鳳来寺の薬師十二神将の中の寅神の姿が, 忽然と消えたと伝えられている。一方, 東照宮には木彫で38体・41頭の虎の彫刻が存在し, 実在する動物の中では最多<sup>12)</sup>である。虎と家康の結びつきの深さ, 東照宮における虎の位置づけを示している。

また, 拝殿の入口正面の唐破風の下に二頭の虎が配されるが, 他の神社の例では, この位置に虎がある場合, 龍と組み合わせられることが多い<sup>13)</sup>。しかし, 東照宮では「龍虎」の組み合わせは見られない。龍虎を並べれば, 龍と虎が対等になってしまうからである。すなわち, 尊敬する家康への家光の従順の証であり, 遠慮であろう。

したがって, 霊獣である龍よりも実在する虎が, 東照宮では上位に置かれていると推察される。なぜならば, 龍は家光の, 虎は家康の干支だからである。これを五色に当てはめれば, 青(龍)よりも白(虎)が上位であるということである。すなわち, 東照宮では白が青よりも色格としては高い位置づけとなり, 青の色格を知る手がかりの一つとなる。

ここまで東照宮において「極彩色」を成す色彩を中心に検証した。次はこれまでに述べた色彩のうち, 青と金で構成される「置紋」についてみていこう。

\* 朝廷から毎年の決まりとして神に捧げる幣帛(へいはく)を届けるために派遣される勅使。

#### 4. 置紋

置紋とは、虹梁や丸桁など建物の目立つ場所に配された紋である。文献によっては「飛紋」と記す場合もある。東照宮関係の各修理工事報告書には、「置紋」または「飛紋」と2つの記述を用いているが、東照宮文庫長であり、権禰宜である高藤晴俊氏によれば、どちらも同じ箇所を指し、厳密な区別はなされていないとのことである。これは現代の修理工事報告書が、江戸時代東照宮の装飾仕様である宝暦3年(1753)の『御結構書』を一部下敷きにしていることによる。

置紋の枠内に形象を配置するが、枠の形は丸や菱輪などさまざまである。「青地に金彩」の拝殿・丸桁・獅子置紋の枠は三輪、水盤舎・虹梁・龍の置紋の場合は菱輪である。枠は纏縹彩色や金彩などで強調され、中に配された形象を目立たせる効果を与えている。

置紋の地は、朱の赤や群青の青などで、その中に枠からはみ出るような勢いで形象が配される。中神庫の虹梁には、朱の地に向い蝶の金彩の置紋、陽明門の柱には胡粉塗りの置紋もある。しかし、ここでは上述の青と金の置紋について検証する。配される形象には、龍・飛龍・鳳凰・唐獅子などがある。

いずれも権力を象徴するものであると推測されるので、以下に形象面をみていきたい。

##### 4.1. 龍

龍には飛龍と龍がある。龍は昇天出来、飛龍は俗界にのみ棲息すると言われている<sup>14)</sup>。その大きな違いは、飛龍が翼をもっていること・足が鳥の爪であること・尾が魚の形であること・体表が鱗ではなく羽毛であること、などである。『大漢和辞典』<sup>9)</sup>には「聖獣の名」や「山の精」などともみえるが、飛龍とは、鳥のように空を飛びまわる龍であることから、ここでは龍の一種として扱う。

龍は、頭が駝・角は鹿・目は鬼・耳は牛・胴体は蛇・腹は蜃・鱗は鯉・掌は虎・爪は鷹とされる。九種類の動物の特徴を有していることから九似(きゅうじ)ともいわれる。言うまでもなく龍は想像上の霊獣で、中国では格別に神霊視される鱗虫の長である。「すぐれた人物のたとえ」・「天子に関する物事に冠する語」などの意味もあり、古代中国以来「天子の象徴」であったことは周知の通りである。古代中国では五本爪の龍は

「王の象徴」であり、一般的に爪の本数が減るほど位格が下がるとされる。朝鮮などの周辺国では、中国に遠慮してか龍の爪は四本であったようだ。さらに東照宮の龍は、爪の数は三本となっている。

「能く幽にして能く明、能く細にして能く巨、能く短にして能く長。春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む」ように、龍の観念はその呪霊を駆使する古代のシャーマニズム的な信仰に起源している<sup>15)</sup>。

東照宮には龍の彫刻が92体ある<sup>16)</sup>が、霊獣彫刻の中では唐獅子に次ぐ数である。これほど多く龍の彫刻が配されるのは、龍そのものが東照宮において重要視されていることを表す。龍が東照宮に多用されたのは、古代中国以来「天子の象徴」とみなされ、東照宮の守護神・家康にふさわしい霊獣であったからであろう。

##### 4.2. 鳳凰

龍が鱗虫の長であるように、鳳凰は鳥類の長である。鳳凰は、「聖人が世に出ればこれに応じて現れるという瑞鳥。梧桐に棲み、竹の実を食い、醴泉を飲む。羽毛は五色で、声は五音に中り、飛べば群鳥これに従うという。雄を鳳、雌を凰という」<sup>9)</sup>とされる想像上の鳥で、吉祥を象徴する。麒麟・亀・龍とともに四瑞として尊ばれた。鳳凰は、「徳」「義」「仁」「信」「忠」「正」「武」の七徳を有するとされる。中国では「龍」を天子に例えるように、「凰」(雌の鳳凰)を皇后に例える。また「鳳駕」「鳳車」など天子・宮中に関わる事物に「鳳」を冠することがある。したがって、鳳凰は天皇との関連を印象付ける。

鳳凰と唐獅子とを比較すれば、鳳凰が本殿の、唐獅子が拝殿の丸桁に配されることから、東照宮では鳳凰が唐獅子よりも上位に置かれることがわかる。

鳳凰は聖徳の天子の兆しとして現れるのであるから、鳳凰の存在するところには「聖徳の天子」が現れていることを示す。東照宮では、天下泰平の世を造り出した家康という「聖徳の天子」が既に現れていることを、鳳凰を多用することで示している。

家康を「聖徳の天子」や「聖人」を意味する鳳凰と重ねることによって、天子とみなしていることが理解できよう。

##### 4.3. 唐獅子

唐獅子は、猪(いのしし)・鹿(かのしし)に対する「カラのしし」である。カラは異国一般を意味する古語であるから外国産の獅子、すなわちライオンのことで

あろう。唐獅子の概念はシルクロードを通じた西方からの伝来と考えられる。「獅」は、「虎豹を食う猛獣であり、その声は雷のごとく、一吼するごとに百獣が辟易するので、獅子吼という」<sup>17)</sup>とある。

東照宮の唐獅子は、霊獣彫刻の中では数が129と最も多く<sup>18)</sup>、そのほとんどが陽明門に集中している。唐獅子は、東照宮という霊廟の守護獣と目される。したがって、本殿や拝殿など本社部分への入口である陽明門に多く配されており、悪霊が入り込むのを防いでいるのである。

また、「獅」は「猛々しさ」や「勇猛ぶり」の印象から、そして「百獣の王」とされることから「王者の象徴」と考えられる。さらに仏教では、人の王である仏の象徴とされる。「王」や「王者」からは、ここでも家康との連合が思い起こされる。

平安時代に清涼殿の玉座の前に唐獅子形を置いたのは、神仏習合思想によって天皇の神格を権威付けるため、神社などの唐獅子狛犬の原型と見られる<sup>19)</sup>。「唐獅子」と「権威」とが一体となっていることがわかる。

以上みてきたように、置紋の主題となる龍や鳳凰などは、家康を象徴するものと考えられ、東照宮においては非常に重要視される。重要視される主題を金彩で枠からはみ出るような勢いで配し、その地には補色の青を使用している。目立つ場所に目立つ配色であるから、東照宮を訪れた人々の目には、自然とこの置紋が印象付けられることになる。すなわち、「青地に金彩」の置紋は、貴重な金を用い、勢い猛の人物を想像させるのである。それに価する人物は、東照宮においては家康以外に考えられないだろう。それによって家康の偉業を偲び、幕藩体制の磐石ぶりを知らしめ、幕府への忠誠心を植えつけるという視覚的仕掛けである。

東照宮を代表する「極彩色」として「青地に金彩」の置紋について主に形象面より述べてきた。しかし、「青地に金彩」では技術的にも、配される場所の面でも「置紋」以上の扱いをされ、唯一無二のものがある。それが「勅額」である。

## 5. 勅額

勅額は家康の象徴というよりも、家康そのものと考えられるので、次は勅額について検証する。

東照宮で表門を過ぎ、右手に下神庫・中神庫・上神庫、左手に神廐・水盤舎などを眺めながら、さらに高い本社地区を目指して進むと、銅鳥居からながめる階

段のさらに上に楼門の陽明門が建っている。「頭でっかち」とも見えるその陽明門の2階唐破風正面に、建造物に名札をつけたような「東照大権現」と書かれた、縦に長い長方形の額がかかっている。後水尾天皇の筆による勅額であり、「東照大権現」とは神となった家康の神号である。

じつは、この神号を掲げるのは東照宮において陽明門だけではなく、境内の入口に建つ石鳥居にも「東照大権現」の額束があり、後水尾天皇の書であることが確認されている<sup>19)</sup>。しかし、こちらは「青地に金彩」ではなく、「黒漆に金彩」である。

勅額の額縁と外郭部を除く部分は『修理工事報告書』によれば、「108代後水尾天皇の宸筆によるという額で、額面中央部に東照大権現の文字を浮彫りにして粉蒔を施し、額面は群青を塗り、・・・」となっている。地の長方形は青、文字は金であるから「青地に金彩」の置紋と同類である。この金文字に使用されている「粉蒔」とは、漆に金粉を蒔いたものである。金箔と違い一度光を内側に取り込んでから光るため反射光が交錯し、深みのある独特な輝きを有するとされる。ここに置紋と同じ青と金の配色であるが、東照宮では置紋が所々で見受けられるのに対して、青地に金彩の勅額はここだけである。

東照宮は建築様式や陰陽五行説など中国文化の影響を受けた建造物であることは既に述べた。そして東照宮の勅額と同じように、青地に金彩の額は北京の天壇公園にある祈年殿にもみられ、ここでも中国との関りの深さを知るのである。

## 6. 置紋と勅額の技法

水盤舎・虹梁にある龍の置紋は、『重要文化財東照宮表門・神廐・水盤舎修理工事報告書』<sup>20)</sup>(以下、『水盤舎修理工事報告書』)には、「龍は置上金箔押。地は群青」と記されている。地の顔料は勅額・置紋とも群青すなわち、青である。「置上金箔押」とは、漆塗で下地をつくった上に丹の具で下塗りを施し、文様を丹の具にて蒲鉾状に盛り上げて立体感を持たせ、剥落防止補強の和紙を生漆にて貼り付け、その上に地塗りの丹の具を塗り、盛り上げた部分には金箔を膠にて貼り付ける方法である。「置上彩色」ともいう。

勅額は前述したように「漆に金粉」であり、龍の置紋は「膠に金箔」である。日光は湿気が多い土地柄ゆえに、動物性の膠を使った彩色は、カビが発生しやすく劣化の進行が早いという。漆のような高価な材料を、下地

ばかりでなく、表面にも用いて、堅牢性に富んだ彩色を作り上げているのが勅額である。

また、同じ金箔でも漆に金箔と膠に金箔では、金の視覚的印象が全く異なる。『修理工事報告書』によれば、陽明門・脇の間の天井と壁が交差する部分が「漆に金箔」の組物であり、金色の光がツヤをもって輝いている。それに対して陽明門・南面左右の隨身像の衣裳は、「膠に金箔」でツヤ消しされた金色の印象である。「漆に金」の優位性は、視覚的に一目瞭然である。

さて、武家政治が始まって以来、時の王権は権威と権力を公(天皇)と武(将軍)の間で分掌してきたが、天照大神の子孫であり、現人神と考えられていた天皇への畏敬の念を捨て去ることは政策上からも出来なかったと推察される。それは、実質的な権力者ではあっても、形式的に将軍として補任されるためには、天皇の存在が必要だったからである。

そのような天皇の宸書であるから、他の大名や庶民への影響力という点においては絶大なものがあった。天皇の宸書に「青地に金彩」の置紋と同じ配色を使うことは、置紋の地位を高め、ほかとは異なるものであることを明確にする効果が期待される。それによって東照宮において「青地に金彩」がいかに重要な彩色であるかを示している。

一方、重要な意味が込められた置紋であることを「青地に金彩」で示したが、天皇の宸書と置紋を同列に扱うことはできない。そこで技法的に差を付け勅額の優位性を保った、と考えられる。いずれにしても、「青地に金彩」が、東照宮において特別扱いされていることは明白である。

## 7. 「青地に金彩」の置紋

東照宮における「青地に金彩」を、筆者は「極彩色」と考える。東照宮の「極彩色」には7つの意味が考えられることを前回指摘した。ここに再録すると

- 1) 地が金色の彩色。
- 2) 対象物が画面いっぱい描かれたもの。
- 3) 縹縷を用いた彩色。
- 4) 「紺丹緑金」の彩色。
- 5) 一見金色に見えるほどに金彩を多用した彩色。
- 6) 高級な技法が用いられた彩色。
- 7) 地が濃色で金彩を含む彩色。

である。

この中で、1)・4)・5)・7) は金彩を含む彩色である。本稿の主題である「青地に金彩」は「7) 地が濃

色で金彩を含む彩色」に当たる。ここでは「青地に金彩」の置紋として代表的な2例を挙げる。

### 7.1. 拝殿・丸桁の獅子\*の置紋(図1)

「青地に金彩」は前回指摘したように、主役型「極彩色」であり、脇役型「極彩色」に当たるのが「縹縷を用いた彩色」である。その特質は図1によく表れている。この拝殿・丸桁の置紋は、『国宝東照宮本殿・石之間・拝殿修理工事報告書』<sup>21)</sup>によれば、文様または主題は「剣牡丹唐草獅子の置紋」、彩色技法の詳細には「地緑青、牡丹唐草は置上絵箔押、花は朱縹縷、葉は群青縹縷、飛紋枠の内獅子図の置上、地は群青埋落し、縁と獅子は金箔押、上墨線書」とある。

「地緑青」とは、丸桁全体の地が緑青の緑であり、置紋周囲の牡丹唐草は膠に金箔の金彩である。剣牡丹\*\*の花は朱縹縷、牡丹の葉は群青縹縷、飛紋とは置紋のことであり、獅子が置上彩色の金彩である。「地は群青埋落し」の「埋落し」とは、凹凸がある箇所凹面に顔料をベタに塗ることをいう。置紋の縁と獅子は置上彩色の盛り上がった金箔押であるので、枠の内側・縁と獅子以外の凹の部分、すなわち置紋の地を群青に塗るということである。その後、獅子の目鼻立ち、尾や鬣の巻き毛を墨で線書きしたものが、獅子置紋である。力強く猛々しい獅子であり、強烈な印象を与える。拝殿の丸桁にはこの「剣牡丹唐草獅子の置紋」を一つの型として横に繰返し文様で描かれるため、一本の丸桁には等間隔で、獅子置紋が配されることになる。

\* 上記『工事報告書』ほかで「獅子」と記されるものは唐獅子のことであり、東照宮では「獅子」が日本の獅子(猪・鹿)を意味することはない。

\*\*1974年の『修理工事報告書』では、トンガリ牡丹、または尖牡丹と記述される文様化された牡丹の花。

### 7.2. 水盤舎・虹梁の龍の置紋(図2)

『水盤舎修理工事報告書』によれば虹梁の彩色名は「置上縹縷極彩色」、文様名は「牡丹唐草に龍の置紋」である。「牡丹の花は胡粉、葉は群青、緑青、朱土の縹縷彩色、唐草は置上金箔押、覆輪を緑青の埋落しに塗る。地は朱。中央に二個の菱輪を置き、中に龍を置上金箔押。縁書は上墨。地は群青」と記されている。

置紋の周りが「牡丹の花は(中略)地は朱」までであり、虹梁全体の地が朱であること、牡丹の花や葉、唐草などが置紋を取り囲んでいることがわかる。置紋につい

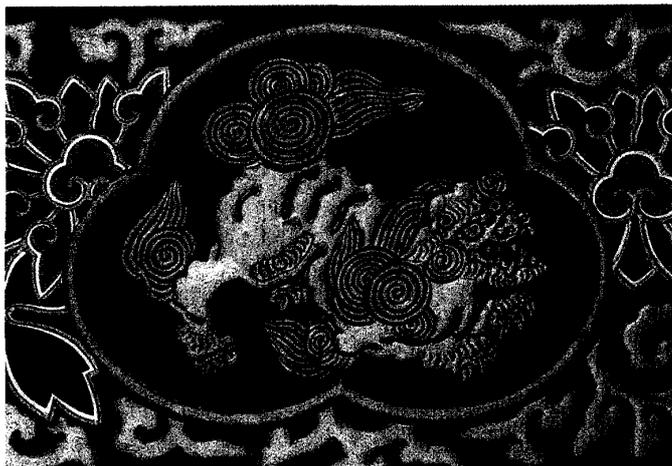


図1. 拝殿・丸桁の獅子置紋

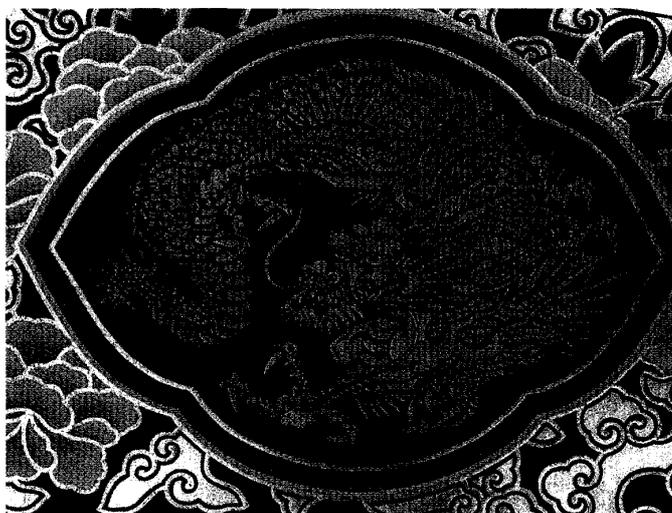


図2 水盤舎・虹梁の龍置紋

ての記述は「中央に(中略)地は群青」の部分である。横長の虹梁の中央付近2箇所に菱輪の置紋が配されているのである。この龍の図像が鳳凰に替わったものが、同じ水盤舎の丸桁に配される。

「青地に金彩」の置紋の「図」では、龍や鳳凰など「天子」や「聖徳の天子」を意味する主題が選ばれている。その色彩は金色であるが、禁色とされる色相・黄が土台である。すなわち、「図」は形象・色彩ともに高貴であることがわかる。

そして、「地」には視覚的にも補色の関係である青が配されるので、金色(黄)が目立つ色相の対比効果を呈する。また、地には高貴な色相・黄と対照的とされる青が使用され、色格の対照性をなしている。この2つの対照性は、置紋をより強調し印象付ける効果を期待したものであろう。

したがって、置紋の「地」は「図」を引き立てるためのもので、その表す意味は「図」にあると考えられる。

「図」は「天子」を象徴する主題であるから、東照宮においては家康を表すことは言を俟たない。神の中の神・最高神として祀られた家康・東照大権現を示すのが「青地に金彩」の置紋である。

## 8. 「極」の考察

前回は『修理工事報告書』の「極彩色」により、東照宮における「極彩色」を示した。それが前頁の1)～7)である。今回は一般的な「極彩色」から、その意味を考察する。「極彩色」は「極」の彩色と考えられるが、その「極」という字は多種多様な意味を有する。既述の『大漢和辞典』には、キョク・ゴクとして29通りの意味が記載されている。その中で、筆頭に挙げられるのが「むね・むなぎ」であり、2番目が「はり」である。

「極彩色」の「極」が建物の「棟や梁」を意味することにより、「極彩色」とは本来建造物の彩色であることを前回指摘した。基本的に筆者はそのように考えている。しかし、東照宮においては少し趣が異なる。それは「極彩色」の「極」の意味を「至上の位」、「天」または「北極(星)」<sup>9)</sup>ととったほうが、より東照宮に適合していると考えられるからである。以下、それぞれによって「極彩色」の辞義を考察する。

### 8.1. 「極」が「至上の位」の場合

「極」を「至上の位」とすると、「極彩色」は至上の位を創り出す彩色、もしくは至上の位を表す彩色となる。東照宮では東照大権現を神の中の神、「至上の位」である最高神とするために、さまざまな策略がめぐらされている。その策略の一つが、配祀神として山王権現が選ばれたことである。

山王権現は神道では天照大神という最高神、仏教では顕教の釈迦、密教では大日という最高位の如来で現れる<sup>22)</sup>という。配祀神とは主神(東照大権現)に添えて祀られる他の神であるから、天照大神、釈迦や大日如来が相殿の神と東照宮では位置付けられる。ことに神道の場合、天照大神が相殿の神となったことは、大きな意味をもつ。天照大神の子孫であり現人神と信じられていたのが天皇であり、東照宮では天照大神と天皇は東照大権現と家康に対応する。東照大権現と天照大神は主神と配祀神の関係であるから、家康と天皇との関係は自ずと理解されよう。

その天皇の地位を巧みに利用しながら、実質的な権力者となり「至上の位」を得たのが家康である。「至上の位」を創り出す、もしくは表す色が「極彩色」であれ

ば、「至上の位」を有する人物は家康を描いて考えられず、家康を表す色が「極彩色」となる。すなわち、「青地に金彩」で表現される置紋と同じである。

## 8.2. 「極」が「天」の場合

また、「極」を「天」と解すると、「極彩色」は天の彩色となり、天国(天寿国)すなわち、極楽浄土を彩る彩色と考えられる。極楽浄土をこの世に具現した空間が、平等院鳳凰堂の中堂内彩色であった。それは鮮やかな暈縹彩色で彩られ、現代の我々がイメージする極彩色と一致する。その中堂内部は「御堂の建立に当たって、堂内の荘厳に『観無量寿経』の絵画化を図った」<sup>23)</sup>とされている(ここでの「御堂」とは、鳳凰堂と呼ばれる前の呼び名である)。したがって、『観無量寿経』に当たれば、極楽浄土の様相を知ることができる。

『観無量寿経』と同じ浄土三部経の一つ『阿弥陀経』<sup>24)</sup>には、極楽が「又舍利弗、極楽国土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是四宝、周市圍繞。是故彼国、名曰極楽」とあり、「又舍利弗、極楽国土、有七宝池、八功德水、充滿其中。地底純以金沙布地。四辺階道、金銀瑠璃玻瓈、磈磈赤珠碼瑙、而嚴飾之。池中蓮華、大如車輪。青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔。舍利弗、極楽国土、成就如是、功德莊嚴」と記されている。極楽は金銀宝玉の類で満ち溢れていることが想像される。

したがって、創建当時の中堂内は金銀宝玉の類で満ち溢れ、それらが螺鈿や鏡の反射によって、光り輝いていた状況だったのではないだろうか。そのような彩色が天(極楽浄土)の彩色、すなわち「極彩色」なのである。それは「極彩色」を多用する東照宮が、すなわち極楽浄土であり、金銀宝玉で満ち溢れていることを示していると考えられるのである。現実に金彩で光り輝く東照宮である故に説得力を有する。

一方で「天」には、「天地万物の主宰者・万能の神」<sup>18)</sup>や「支那ニテ、天ヲ万能ノ神トシテ称スル語・天子ニ係ル物事ニ添エテ、尊称シ奉ル語」(『大言海』富山房、1984)などがあるから、「至上の位」と同義であることもわかる。

## 8.3. 「極」が「北極(星)」の場合

さらに、「極」を「北極(星)」とした場合は、前述の陰陽五行説との関連が浮かぶ。古代中国哲学がその天文学と深く結びついていることは知られる通りで、「北極(星)」は陰陽五行説では「大極」や「太一」とみなされ

る。

「大極」とは原初唯一絶対の存在であり、この大極の神格化が宇宙神・「太一」である。「大極」すなわち「太一」なのである。「太一」とは中国古代天文思想から生み出された最高の天神であるが、日本神道における至上の神でもある<sup>25)</sup>。

伊勢の皇大神宮に「大鬘(おおさしは)」という神事がある。大鬘(長さ9mほどの青竹の先端に、巨大な団扇と扇型とを取り付けたもの<sup>26)</sup>)が神田の畔に立てられ、五穀豊穰などを祈るのである。その扇型に「太一」という文字を認めるのは、中国の「太一」に日本の神が習合されていることを示している。陰陽五行説は中国から入ってきたが、その場合にも日本古代信仰の理念は決しておろそかにされず、その強引とも見える導入によって、むしろその哲理を借りて、曖昧模糊としている日本の古代信仰の理論化をはかっている<sup>27)</sup>とさえみられる。

また、「天皇大帝は北辰の星なりとあり、北極星は古くから君主にたとえられていた」<sup>28)</sup>ことより、天皇大帝は北極星の名称であったことがわかる。それが日本の王(おおきみ)の呼称として用いられるようになったのである。すなわち、北極星とは天皇であり、かつ最高の天神なのである。北極星は不動(正確にはほとんど動かない)の星であり、古代中国においては宇宙を主宰する神として認識されており、その思想はわが国にももたらされていた<sup>29)</sup>。

したがって、「極」を「北極(星)」とすると、「極彩色」は最高の天神を表す彩色ということになる。すなわち東照宮の「極彩色」は、最高の天神・東照大権現を表す彩色と考えられるのである。

このように「極彩色」の辞義からみると、「極」は「至上の位」において家康を、「北極(星)」において東照大権現を、そして「天」において東照宮を表す。「極彩色」は「極」の「彩色」であるから、一般的な意味からみても家康と東照大権現そして東照宮を表す彩色が「極彩色」と考えられる。この中で「家康と東照大権現を表す彩色」という意味においては、先の「青地に金彩」の置紋と同じである。

そして、光り輝く金彩によって極楽浄土と見紛うばかりの、東照宮を荘厳する彩色が「極彩色」であるという見方もできよう。

## 9. 考察

「青と金」の配色である置紋が東照宮において重要視される理由を考察する。

まず、金は貴重で高価でもあったため、誰もが手にすることができるというわけではなかった。そのような金だけを使って描かれる形象や文字ゆえに置紋や勅額は、存在価値を示し、特別な意味をもつ。

したがって、「青地に金彩」が極彩色と呼ばれる理由の一つは金にあると考えられる。金は通常の色相・黄に「つや」という金属光沢の輝きを足したものである。しかもその土台である黄は高貴な色とされ、貴金属・金は権力や富を象徴する。高貴であり、権力や富を象徴するのが金だからである。

そして、東照宮の「極彩色」の7つの意味のうち4つは金彩を含む彩色であった。金を使用した彩色そのものを、金が高価で希少価値があることにより極上の彩色とする考え方が根底にあったことが推察される。

また、鮮やかな赤・青や緑などで構成される現代で思い描くところの極彩色と置紋や勅額との大きな違いは、その色数であり、青と金の2色で「極彩色」を成すという点にある。青と金の2色による「極彩色」は、東照宮に固有のものかもしれない。

「青と金」の「極彩色」は二色の単純性を、その青と金(黄)の視覚的対照性と色格における対照性によって、際立たせ、強く印象付ける。

置紋の形象として採用された主題(家康の象徴)には、現在の東照宮に造替した家光の家康崇拜の思いが込められていると考えられる。家光の家康崇拜は、両親が弟・忠長を寵愛することを憂慮した祖父の家康が長幼の序を明確にし、家光の世継決定が確定したとされることによる。家光にとって家康の存在は絶対であり、それは幕府にとっても同様であった。絶対である家康がなり変わった東照大権現という錦の御旗を掲げ、その旗の下に人心を収攬したのが家光であった。その錦の御旗と同じ役割をしたのが、「青地に金彩」の置紋や勅額であったと筆者は考える。家光や幕府の家康に対する崇拜心を形にしたものであるから、「青地に金彩」が「極彩色」の中で最上位に位置付けられるのは当然のことであろう。

## 10. まとめ

東照宮の極彩色を代表する「青地に金彩」について、陰陽五行説を含めて色彩・形象と辞義の面から検証した。

東照宮では、色彩や形象など多くの場所に、陰陽五行説の影響がみられる。それは、中国の陰陽思想や神仙思想を取り入れ、東照大権現を最高神に祀り上げるためと考えられる。

最高神となった東照大権現が坐す東照宮は、「極彩色」の辞義から極楽浄土とみなすこともできる。極楽浄土、すなわち東照宮を荘厳する彩色が「極彩色」とも考えられるのである。

ところで、江戸時代初期の東照宮では7つの意味の「極彩色」が確認できる。中には現代でも極彩色と称するものも含まれるが、ほとんどは現代の極彩色の概念とは異なるものである。その最たる例が「青地に金彩」の置紋である。水盤舎・虹梁の「龍の置紋」や拝殿・丸桁の「獅子置紋」などに代表される。地と図の2色から成る極彩色で、「地」が群青の青、「図」の龍や唐獅子などが金彩で表されている。同様に陽明門の勅額も「青地に金彩」であり、置紋と同じ意図を含むと考えられる。

「青地に金彩」の極彩色は、置紋として考える場合、形象の金彩の部分は色相・黄の下地を含んだ金色として取り扱うことが重要であろう。金を構成する要素の一つとして、黄を排除することはできないからである。すなわち、金色は色相・黄と貴金属・金で考えなければならない。

したがって、「青地に金彩」は、色相では青と黄となる。「青」は未熟で官位の低い色であり、賤者の服の色とされる。それに対して「黄」は禁色として用いられるほどに高貴な色である。金は権力を視覚的に表し、その面積の大小は権力の大きさを示す尺度であった。

すなわち、色として決して格が高いとはいえない青地の上に、最も尊い色であり権力の象徴でもある金を文字にして配したのが勅額であり、龍や鳳凰などの形象として配したのが置紋である。

龍や鳳凰など図の主題となるものは天子を象徴することから、東照宮では家康を意味すると考えられる。置紋や勅額は家康を表すものであるから、東照宮の要所にあり目を光らせながら、徳川幕府の安泰を見守っていると考えることもできよう。

東照宮の「極彩色」は、眩耀誇示によって徳川幕府の権威を象徴するものであり、東照宮や東照大権現・家康を荘厳する彩色が「極彩色」ともみることができよう。その中でも「青地に金彩」の置紋や勅額は、家康個人の威光を象徴していると考えられる。

## 11. 謝辞

本稿の作成に当たり、文星芸術大学教授・小町谷朝生先生のご指導をいただきました。心よりの感謝を申し上げます。

## 参考文献

- 1) 日光社寺文化財保存会, 国宝東照宮陽明門・同左右袖塀修理工事報告書(1974)
- 2) 吉野裕子, 陰陽五行と日本の民族, 人文書院(1983)37
- 3) 内藤正敏, 江戸・王権のコスモロジー, 法政大学出版局(2007)270-272
- 4) 内藤正敏, 上掲書, 274
- 5) 吉野裕子, 前掲書, 171
- 6) 内藤正敏, 前掲書, 299
- 7) 吉野裕子, 前掲書, 201
- 8) 北京・对外経済貿易大学/共同編集, 日中辞典, 小学館(2002)
- 9) 諸橋轍次, 大漢和辞典, 大修館書店(1955)
- 10) 永田泰弘/監修, 日本の269色, 小学館(2002)88
- 11) 桑田忠親/校注, 信長公記, 人物往来社(1965)197-199
- 12) 高藤晴俊, 東照宮再発見, 日光東照宮社務所(1991)114
- 13) 高藤晴俊, 日光東照宮の謎, 講談社現代新書(2004)132
- 14) 栃木県教育委員会, 重要文化財本地堂修理工事報告書(1968)24
- 15) 白川静, 新訂・字統, 平凡社(2004)
- 16) 高藤晴俊, 日光東照宮の謎, 前掲書, 158
- 17) 白川静, 字通, 平凡社(1996)
- 18) 北原保雄他, 日本国語大辞典・第2版, 小学館(2003)
- 19) 高藤晴俊, 東照宮再発見, 前掲書, 12
- 20) 日光二社一寺文化財保存委員会編, 重要文化財東照宮表門・神廄・水盤舎修理工事報告書(1965)
- 21) 日光二社一寺文化財保存委員会, 国宝東照宮本殿・石之間・拝殿修理工事報告書(1967)
- 22) 内藤正敏, 前掲書, 93
- 23) 小松茂美, 平等院鳳凰堂色紙形の研究, 中央公論美術出版, 1973, 122
- 24) 中村元・早島鏡正・紀野一義/訳注, 浄土三部経(下), 岩波文庫(1991)119-183
- 25) 吉野裕子, 陰陽五行説からみた日本の祭, 弘文堂(1978)107
- 26) 吉野裕子, 上掲書, 105
- 27) 吉野裕子, 陰陽五行説からみた日本の祭, 前掲書, 34
- 28) 飯島忠夫, 日本上古史論, 中文館書店(1947)60-61
- 29) 高藤晴俊, 日光東照宮の謎, 前掲書, 43

## 図録

図1: 日光社寺文化財保存会/編, 日光社寺建築彩色文様図譜, 大塚巧藝社(1986)193

図2: 日光社寺文化財保存会/編, 上掲書, 92

(投稿受付日 2008年10月8日)

(掲載決定日 2009年3月19日)

## 著者紹介



北嶋 秀子

2008年文星芸術大学大学院・博士  
後期課程修了, 博士(芸術)

日本色彩学会

hideko@mta.biglobe.ne.jp